



# 黒盛り塚への帰還

**開始条件:** レベル5のブルート

**目的:** 敵の全滅

## 序章:

馴染みの石段を下り、一息つくと、古き死臭と肉が腐ったような悪臭のせいで、怒りがこみあげてきた。それは自分自身に対する怒りであった。以前にこの地下へと足を踏み入れ、この臭いを嗅いだ時のことを覚えている。グルームヘイヴンに到着して初めての仕事だった。恐怖で身がすくんでいた。

自分が恐怖している姿を、仲間の目の前で晒すことになるうとは夢にも思わなかった。武装した盗賊どもの巣窟へと突撃するために、仲間は君を頼りにしていた。これだけの巨体だと、誰も君が恐怖を感じるなどとは思ってもいなかったようだが、やむを得ない時もある。

今もなお、この場所への苦手意識に悩まされている。だが「黒盛り塚の奥深くに、強力な武器が隠されている」という噂を耳にしたとき、君はその危機にひとりで立ち向かう絶好の機会を得たと思い、気づくと舞い戻っていた。

君は今、あの頃よりも鍛えあげられて強くなった。この階段を降りることに、もはや恐怖は覚えず、高揚感に満たされていた。あの暗き広間への突撃の後でも、どこかの不運な盗賊団が再びここを根城にしてくれはしないかと、君は願った。

底まで降り、扉を蹴破る。どうやら失望せずに済んだらしい。



数知れぬ傷を負ったが、最後の部屋へと到達した。すべては記憶の再現だった……すなわちスリした盗賊と動く骸骨だ。

「あらら、来る場所を間違えたわね」女の射手が語りかけてきたが、黙るよう手で制した。こんな愚か者たちとお喋りをして浪費する時間などない。

## 終章:

足を引きずりながら部屋の裏手にあった階段へと向かう。心の底から大声をあげて笑った。止めることができる者など誰もいない。

血の痕跡をたどり、地下墓地の下層に赴き、手がかりを求めて歩みを進める。運がよかった。あるいは盗賊たちは、君の哄笑に恐れをなしたのだろう。いずれにせよ剣は見つかり、それ以上の脅威などなく、そこを立ち去ることができた。

## 報酬:

アイテム 134 番〈武骨な剣〉



使用する  
地形タイル:

11b  
G1b  
L1a



盗賊の  
衛兵



盗賊の  
射手



生ける  
骸骨



負傷の屍  
(× 2)



テーブル (× 2)